

<実習評価票集計報告>

調査で回収された書式のうち、評価票については5県が統一様式を採用していた。系列の養成校で共通の様式を採用しているものが2校あったので、7種類の評価票を対象とし、評価項目（「態度」「知識・技能」など）と評価項目の内容、評価方法、総合所見欄の有無、評価項目以外の書式（指導担当者の捺印欄があるかどうかなど）を分析した。

1. 評価項目以外の書式

実習施設・施設長名・施設長捺印欄は7種類の評価票全てに欄が設けられていた。主任職員・指導職員については、7件中5県で主任職員の氏名記入欄・捺印欄があり、指導職員の氏名記入欄は7件中6県で設定されており、そのうち5件では捺印欄も設けられていた（表1）。

表1. 実習評価票の主任職員・指導職員の氏名捺印に関する設定状況（数字は件数）

	主任職員氏名	主任職員捺印	指導職員氏名	指導職員捺印
欄あり	5	5	6	5
欄なし	2	2	1	2

実習期間は全ての評価票で設定されており、実習開始日・終了日・日数の記載欄が設けられていた。勤務状況については出勤・欠勤回数の記入欄は7件中6件で設定されていたが、そのうち3件は「出勤」「欠勤」表記であり、残りの3件は「出席」「欠席」表記であった（表2）。そのほか、病欠・事故欠の回数記入欄を設けているものが1件あった。

表2. 出勤・欠勤回数の記入欄設定状況（数字は件数）

	出勤状況_出勤回数	出勤状況_欠勤
あり（「出勤」「欠勤」）	3	3
あり（「出席」「欠席」）	3	3
なし	1	1

遅刻・早退回数記入欄は、7件中6件で設定されていたが、無届の遅刻回数記入欄を別に設けているのはそのうち1件のみであった（表3）。出勤状況の備考欄は7件すべての評価票で設定されていた。

表3. 遅刻・早退回数記入欄の設定状況（数字は件数）

	遅刻回数	遅刻_無届回数	早退
あり	6	1	6
なし	1	6	1

2. 評価方法に関する記載事項について

評価方法については、7件の様式すべてにおいて5段階ないし4段階の評価規準が示されていた。4段階のものが2件、5段階のものが5件であった。4段階の評定規準を設定していた2件のうち1件では「A=優相当（80点以上）」という形で基準点が明示されていた。他の6件については、基準点は設定されていなかった（表4）。

表4 評価規準・所見欄の設定

	評価規準	評価規準点	合計点記入欄	内容別所見 (備考)	総合所見 (備考)
あり	7	1	1	2	7
なし	0	6	6	5	0

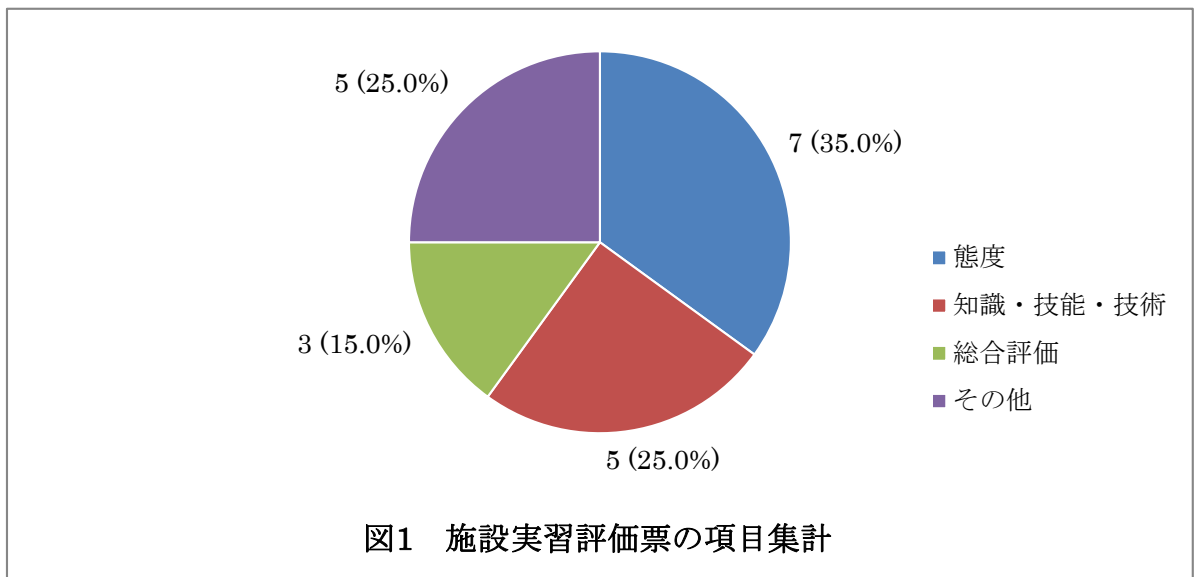
3. 評価項目と評価内容の集計

実習評価票の評価項目及びその内容について、実習種別に集計を行った。

(1) 保育実習Ⅰ（施設）と保育実習Ⅲ

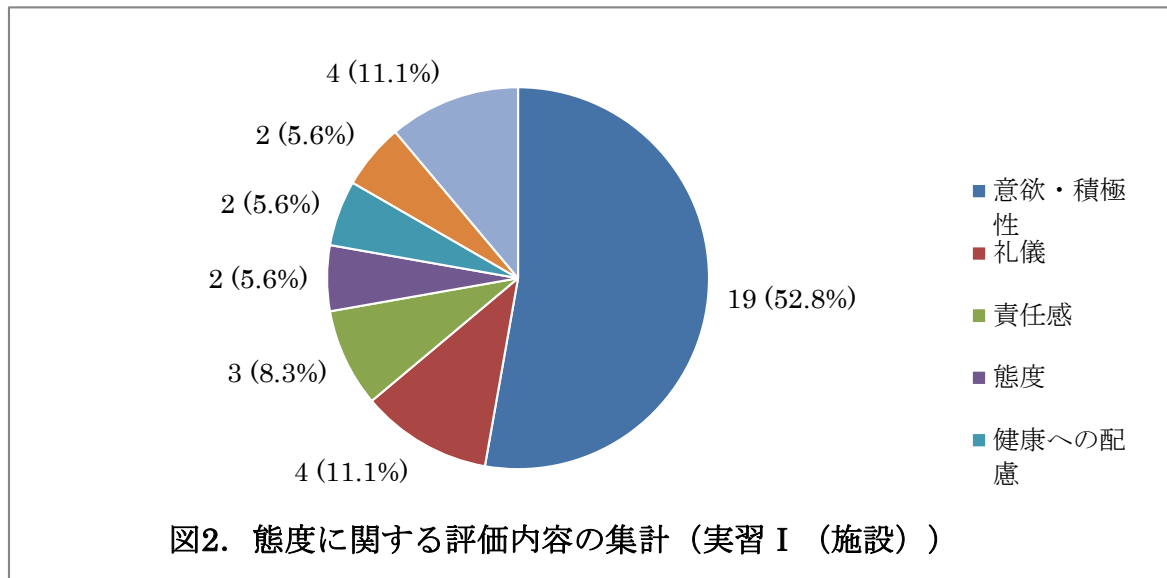
① 保育実習Ⅰ（施設）

保育実習Ⅰ（施設）の評価票7種類に記載されている評価項目の種類について集計を行った結果を図1に示す。



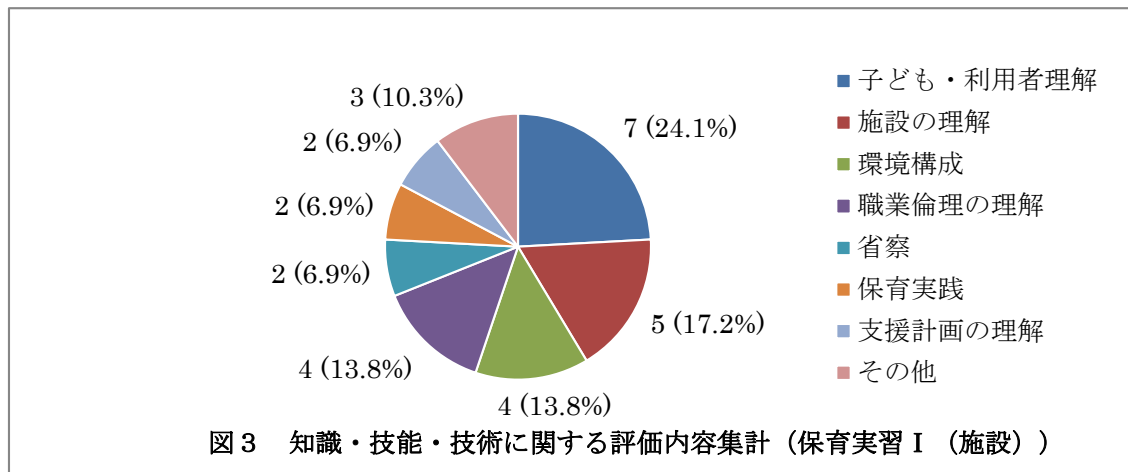
評価項目を、その意味するところにより「態度」「知識・技能・技術」「関心」「保育実践」「実習内容」「関心」「総合評価」に分けて集計を行った。意欲・積極性など「態度」に関する項目が20項目中7項目と最も多く、知識・技能・技術に関する項目は20項目中5項目であった。評価内容についてもその語句に従い分類を試みた。その結果、「意欲・積極性」「礼儀」「責任

感」「態度」「健康への配慮」「協調性」「健康管理」「保育士としての自覚」「実習態度」が態度に関する評価内容に分類された。知識・技能・技術に関する項目には、「子ども・利用者理解」「施設の理解」「環境構成」「職業倫理の理解」「省察」「保育実践」「支援計画の理解」「集団への配慮」「計画作成」「実習意義の理解」が分類された。「記録」「外部とのかかわり」「関心」「総合評価」は態度と知識・技能・技術に当てはまらない評価内容として分類された。評価項目別に評価内容の集計を行ったところ、態度に関する評価内容は図2のようになった。



「意欲・積極性」が 36 件中 19 件（52.8%）と最も多く、次いで「礼儀」（11.1%）、「責任感」（8.3%）の潤であった。「健康への配慮」「協調性」「態度」はそれぞれ 36 件中 2 件（5.6%）で同数であった。「保育士としての自覚」「健康管理」「実習態度」はそれぞれ 1 件であったので「その他」に分類した。

知識・技能・技術に関する評価項目の内容についても同様に集計を行ったところ、全 29 件の評価内容のうちで最も多かったのは「子ども・利用者理解」（7 件、24.1%）であり、次いで「施設の理解」（5 件、17.2%）、「環境構成」（4 件、13.8%）、「職業倫理の理解」（4 件、13.8%）であった。「省察」「保育実践」「支援計画の理解」はそれぞれ 2 件（6.9%）であった。



② 保育実習Ⅲ

保育実習Ⅲについては、回収された評価票 2 種類の評価票を対象として分析を行った。評価項目は「態度」「知識・技能・技術」の 2 種類に分類された。評価項目別に、評価内容の分類を集計した結果を表 5 に示す。

表 5. 評価項目ごとの評価内容集計（保育実習Ⅲ）

評価項目	評価内容	件数
態度	責任感	2
	意欲・積極性	2
	探求心	2
	協調性	2
	言葉遣い・態度・礼儀	1
知識・技能・技術	職業倫理の理解	2
	自己課題	2
	支援計画	2
	子ども（利用者）へのかかわり	2
	保育者の理解	1
	他職種との連携	1
	実習記録	1
	施設の理解	1
	子ども(利用者) 理解	1
	環境構成	1
	外部とのかかわり	1

実習Ⅰ（施設）と実習Ⅲにおける項目・内容の差異

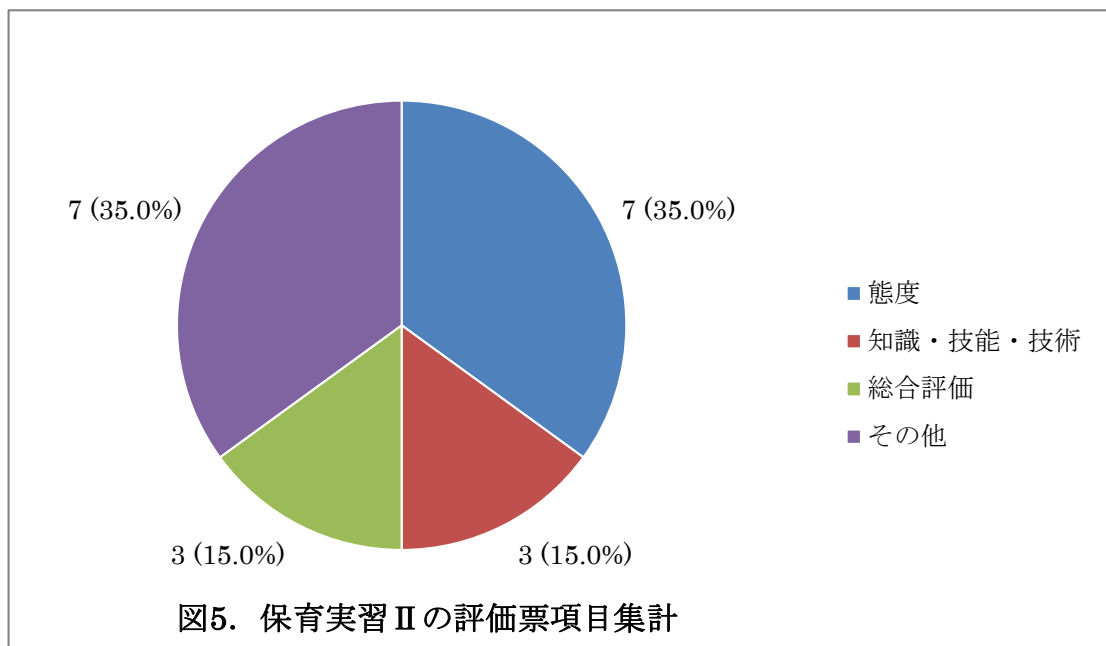
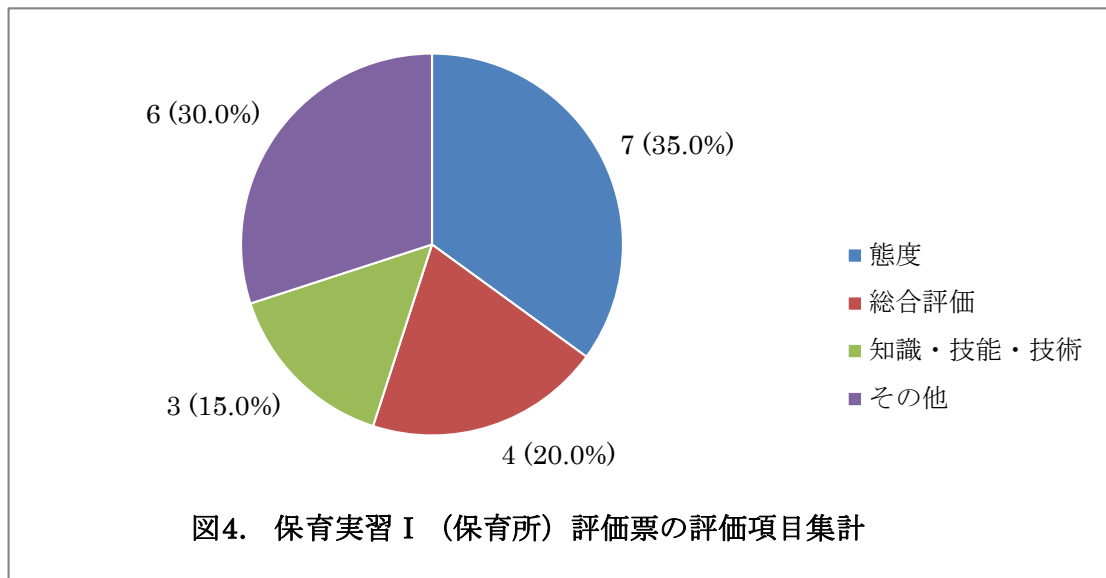
実習Ⅰと実習Ⅲの評価票を比較すると、評価内容には類似性と若干の違いが見られた。態度に関する評価内容では、実習Ⅰ・Ⅲともに「意欲・積極性」「責任感」「協調性」が用いられていた。知識・技能・理解に関する内容では、実習Ⅰ・Ⅲともに「施設の理解」「環境構成」にかかわるものが用いられていた。

一方で、相違点として、実習Ⅲは「探求心」が 2 種類の評価票のいずれにおいてもみられた。同様に、知識・技能・技術に関する内容では、「自己課題の明確化」が実習Ⅲの評価票で用いられていた。

(2) 保育実習Ⅰ（保育所）と保育実習Ⅱ

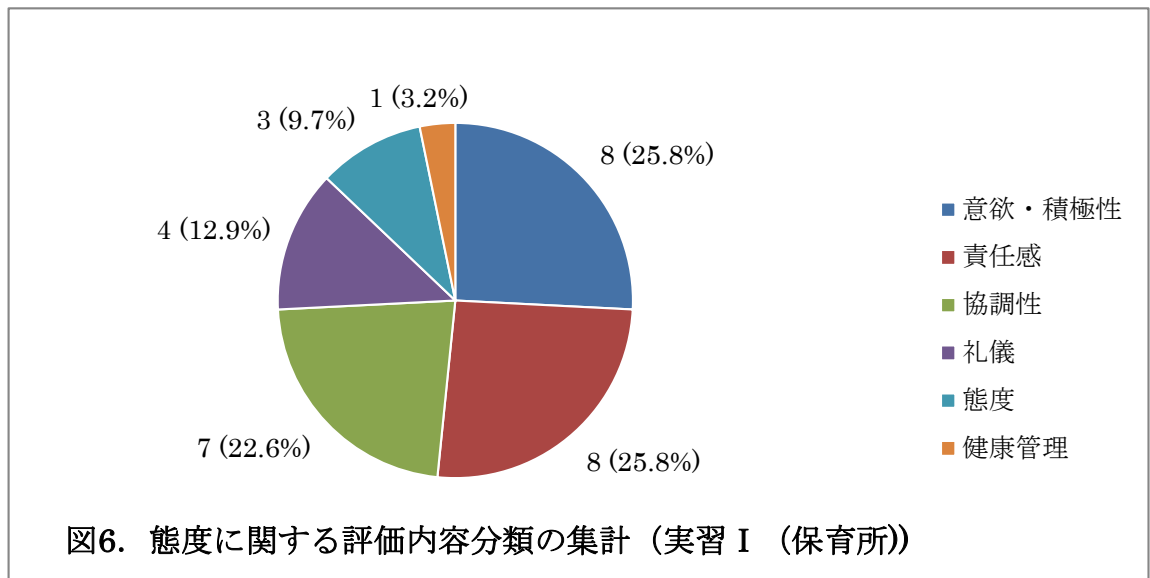
保育実習Ⅰ・Ⅱの評価票には 20 件の項目と、それらの項目に対して実習Ⅰでは総計 85 件、実習Ⅱでは 87 件の評価内容が設定されていた。評価項目をその意味するところにより「態度」「知識・技能・技術」「保育・子どもへの関心」「実習内容」「実習記録」「実習能力」「保育能力」「保育実践」に分類し、7 種類の評価票のなかで 1 回のみ現れた評価項目を「その他」にまとめて集計した。実習Ⅰの集計結果を図 4 に、実習Ⅱの集計結果を図 5 に示す。

<評価票-4>

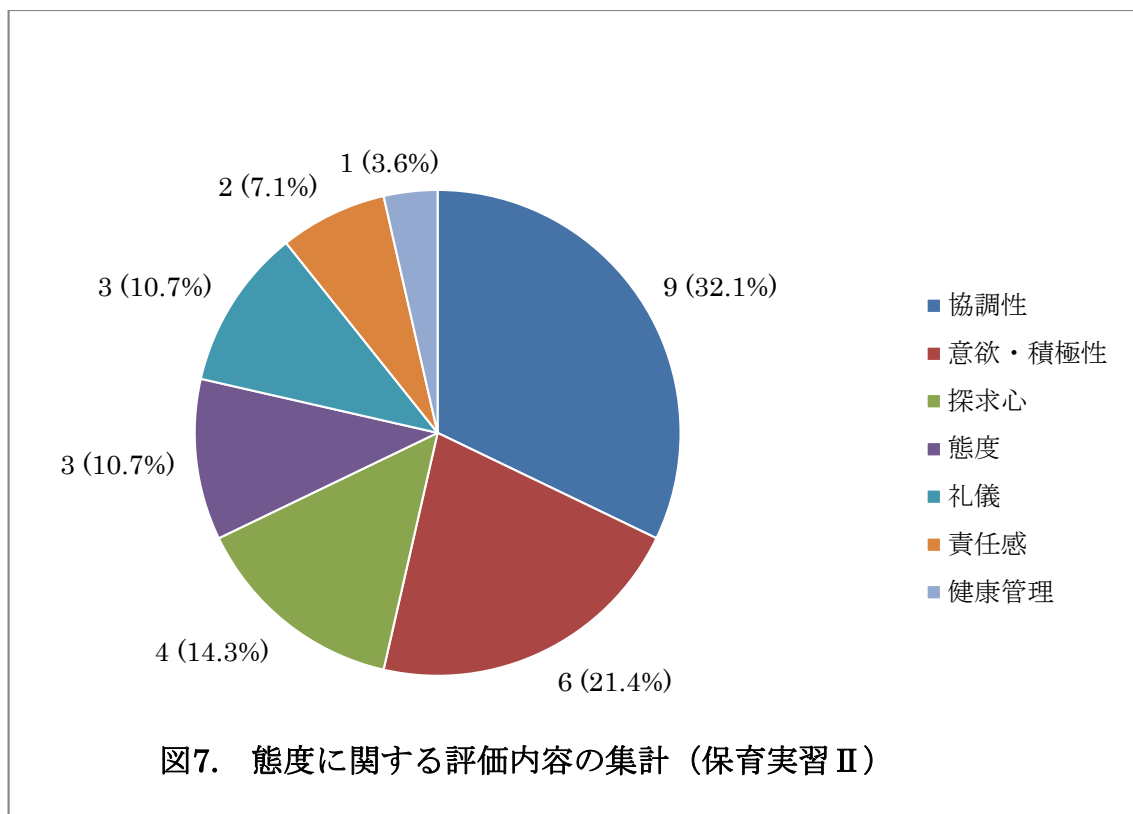


実習Ⅰの評価票について項目の構成をみると「態度」が20件中7件と最も多く、次いで「総合評価」が4件、「知識・技能・技術」が3件であった。実習Ⅱの評価票では、「態度」が7件で最も多く、「総合評価」「知識・技能・技術」はそれぞれ3件であった。評価項目の構成では、実習Ⅰ・Ⅱに大きな差異は認められないことがうかがえる。

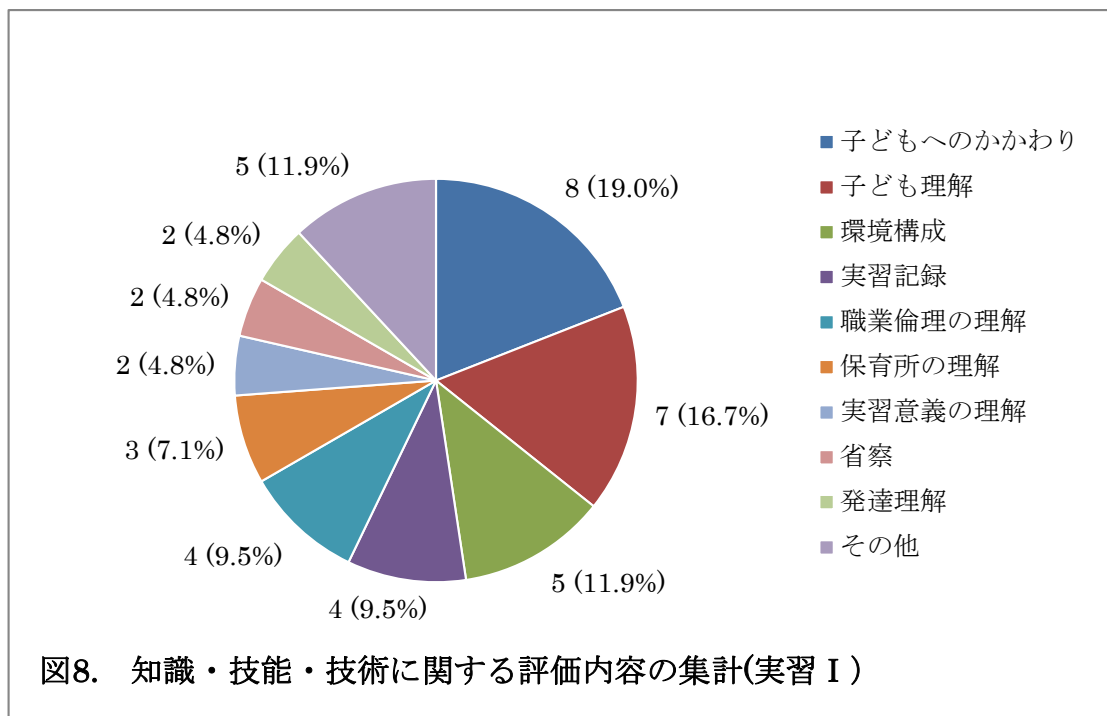
評価内容について類似した意味のものをまとめ、対応する評価項目の分類別に集計した。項目「態度」について、実習Ⅰの評価内容の集計結果を図6に、実習Ⅱの評価内容集計を図7に示す。実習Ⅰにおける「態度」の評価内容は合計で31件あり、「意欲・積極性」「責任感」がそれぞれ8件(25.8%)と最も多く、次いで「協調性」が7件(22.6%)、「礼儀」が4件(12.9%)であった。



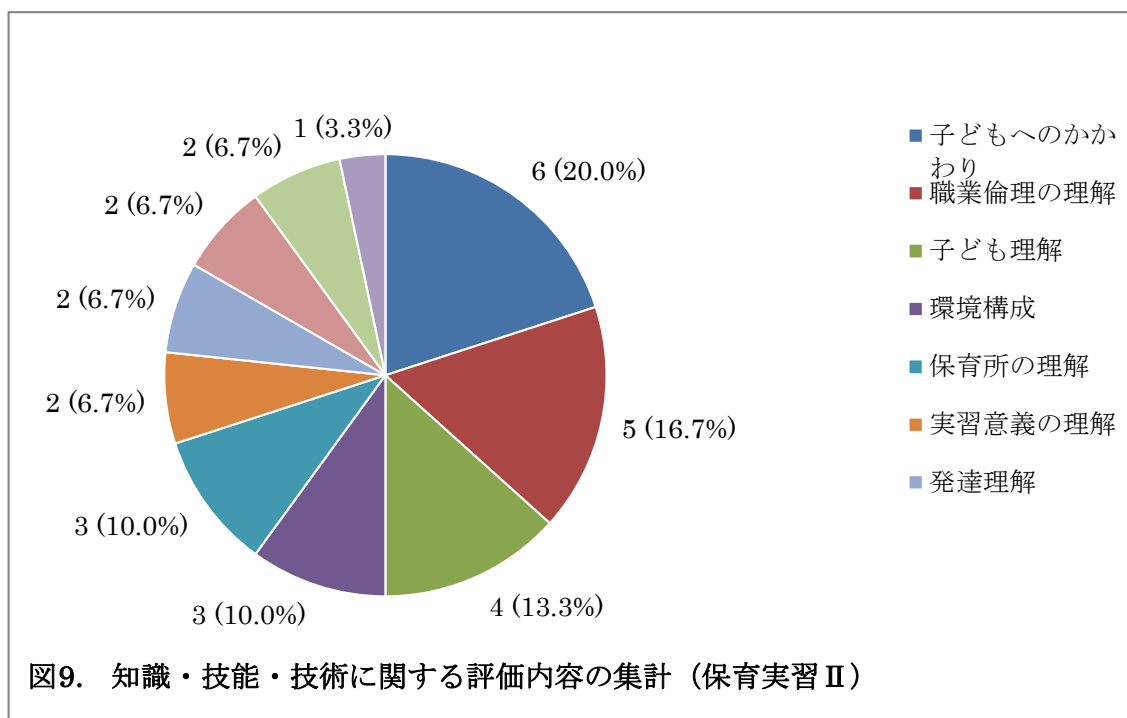
実習Ⅱにおける「態度」に関する評価内容は28件であった。割合は「協調性」が9件(32.1%)と最も多く、次いで「意欲・積極性」「子どもへのかかわり」(6件、21.4%)、「探求心」(4件、14.3%)、「態度」(3件、10.7%)、「礼儀」(3件、10.7%)、「責任感」(2件、7.1%)、「健康管理」(1件、3.6%)の順であった。



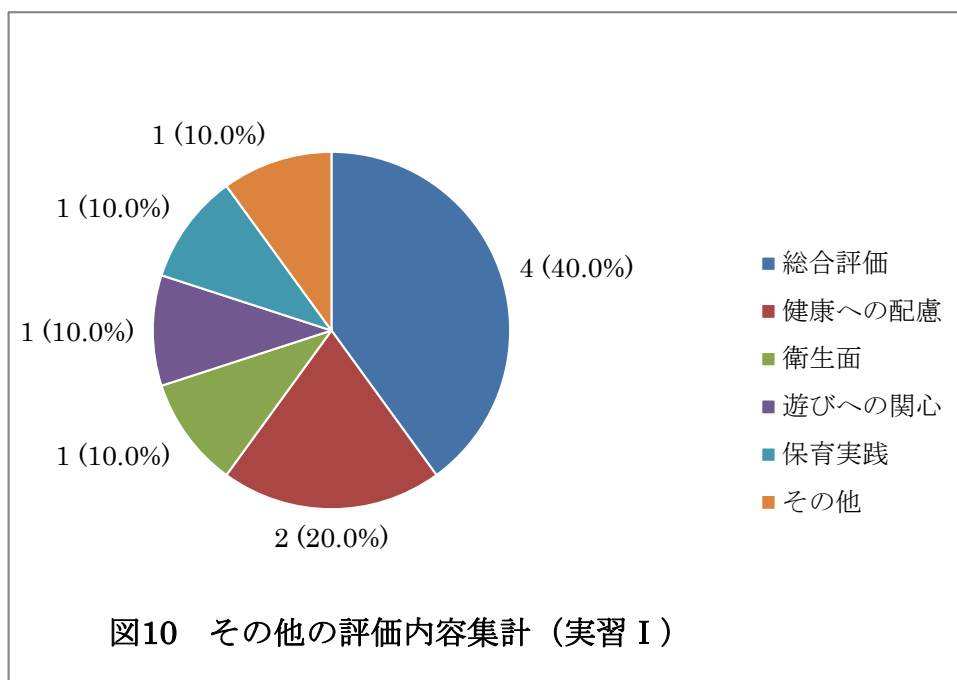
実習Ⅰにおける「知識・技能・技術」に関する評価内容は合計42件あり、評価内容の割合は「子どもへのかかわり」が8件(19.0%)で最も多く、次いで「子ども理解」(7件、16.7%)、「環境構成」(5件、11.9%)、「職業倫理の理解」「保育所の理解」(それぞれ4件、9.5%)、「実習意義の理解」(3件、7.1%)であった(図8)。



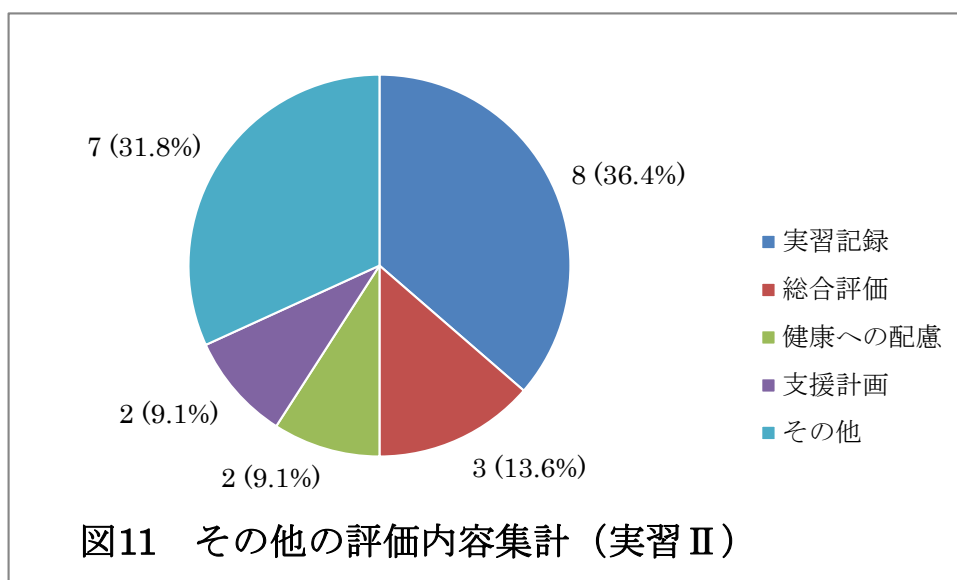
実習 II の評価票では、「知識・技能・技術」は 30 件あり、最も多かったのは「子どもへのかかわり」(6 件、20.0%)であった。次いで「職業倫理の理解」(5 件、16.7%)、「子ども理解」(4 件、13.3%)の順であった(図 9)。



「態度」「知識・技能・技術」以外の評価項目に関する評価内容については、実習 I の評価票では 10 件のうち「総合評価」が 4 件と最も多く、次いで「健康への配慮」が 2 件であった。「衛生面」「遊びへの関心」「保育実践」はいずれも 1 件であった(図 9)。



実習Ⅱでは、「態度」「知識・技能・技術」以外の評価項目に関する内容は22件であった。そのうち最も多かったのは「実習記録」（8件、36.4%）であり、次いで「総合評価」（3件、13.6%）、「健康への配慮」「支援計画」（いずれも2件、9.1%）であった。



4. 調査票“指導のポイント”の記述内容について

回収された31校分の「指導のポイント」について、評価票をどのように活用しているかを集計した。19校で事前指導に評価票を使用すると回答しており、活用法としては19校すべてで「項目を学生に説明・周知」していた。事後指導に関しては27校で個別面談時に評価票を使用していると回答しており、そのうち18校が個人面談時に使用すると記述していた。個人面談における指導方法では「所見を中心に大まかに伝える」「課題などポイントを絞って伝える」ものや「自己評価票と施設の評価との評価の比較をさせる」などの方法があげられていた。

